



SDGs

アクションブック



no one will be left behind

169のターゲット、
232の指標はこちらから ▶
[SDGs for School]



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

1 貧困をなくそう 	2 飢餓をゼロに 	3 すべての人に健康と福祉を 	4 質の高い教育をみんなに 	5 ジェンダー平等を実現しよう 	6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに 	8 働きがいも経済成長も 	9 産業と技術革新の基盤をつくろう 	10 人や国の不平等をなくそう 	11 住み続けられるまちづくりを 	12 つくる責任 つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を 	14 海の豊かさを守ろう 	15 陸の豊かさも守ろう 	16 平和と公正をすべての人に 	17 パートナーシップで目標を達成しよう 	

SDGs
アクションブック
さが

発行：地球市民の会

目次

地球は未来の子どもたちからの預かりもの 地球市民の会..... 4

SDGsアクション in さが

1 貧困をなくそう 地球市民の会.....	6
2 飢餓をゼロに こどもおなか一杯便.....	8
3 すべての人に健康と福祉を 看護小規模多機能むく.....	10
4 質の高い教育をみんなに 佐賀星生学園.....	12
5 ジェンダー平等を実現しよう poco a bocca.....	14
6 安全な水とトイレを世界中に 佐賀市下水浄化センター.....	16
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに GOOD ON ROOFS.....	18
8 働きがいも経済成長も 大町自動車学校.....	20
9 産業と技術革新の基盤をつくろう Code for Saga.....	22
10 人や国の不平等をなくそう 佐賀西部コロニー.....	24
11 住み続けられるまちづくりを 肥前浜宿まちづくり公社.....	26
12 つくる責任 つかう責任 テムデサック.....	28
13 気候変動に具体的な行動を 佐賀大学 海洋エネルギー研究センター.....	30
14 海の豊かさを守ろう 佐賀ん海苔漁師.....	32
15 陸の豊かさを守ろう 中村製材所.....	34
16 平和と公正をすべての人に 被害者支援ネットワーク佐賀 VOISS.....	36
17 パートナリシップで目標を達成しよう CSO 誘致事業.....	38

中学生によるSDGsアクション・レポート 龍谷中学校・高等学校..... 40

レポート① 川崎空間研究所..... 42

レポート② サガン鳥栖..... 46

レポート③ 東よか干潟..... 50

佐賀県のSDGsアクション

中学生が知事に質問してみました！..... 54

未来に向けて、佐賀を語ろう！ 佐賀県知事 山口祥義..... 56

佐賀県の取り組みとSDGs..... 58

Sustainable Development Goals=SDGs(エス・ディー・ジーズ)は2015年9月にすべての国連加盟国の合意により採択された、2030年までの「持続可能な開発目標」です。17個の目標(ゴール)、169個のターゲット、232個の指標から成り立っています。SDGsは、気候変動の激化、貧富の格差拡大、紛争の増加など、このままでは、この美しい地球を次の世代に引き継いでいけないという強い危機感から生まれました。本冊子では17個のゴールに沿って、SDGsの達成に貢献する佐賀県内の活動を紹介しします。

SDGsアクション in さが 事例ページの構成

※目標17は国連や政府、自治体との協働の場合

地球は未来の子どもたちからの 預かりもの

ネイティブアメリカンに伝わることわざに、「自然は祖先からの贈りものではなく、子孫からの預かりものである」という言葉があります。現代風に言い換えれば「地球は未来の子どもたちからの預かりもの」だと言えるでしょう。

この地球が自分のものではなく、預かりものならば、きれいなままに、できればもっときれいにしてバトンタッチしたいものです。ところが、私たちの地球は私たちの手で大きく壊してしまい、もう昔のように戻ることができないほどの状態になりました。これではダメだと気づいた私たちはSDGsという世界共通の目標を持つことで何とかしよう動き出しました。

「誰も置き去りにしない」というのがSDGsの大切な考えです。世界で困っている人たちも、未来の子どもたちも、今を生きる私たちも、みんなが共に幸せになるための目標としてSDGsが設けられました。しかし、これを達成することは大変難しいことです。ですから、そのためには世界中すべての人、大人も子どもも企業も市民も行政も、みんなの力を合わせる必要があります。

SDGsを達成するための活動は国連や遠い世界での話で自分には関係ないと思う人もいることでしょう。でも、身近ですでに実施されている活動もあることを紹介し、みなさんの活動の参考になれ

ばいいかと、『SDGsアクションブックさが』を作成しました。

この冊子は、「誰もやらないのならば、私がしてもしかたがない」と思う人ではなく、「誰もやらないのなら、せめて私だけでもしよう」と思う人のためのガイドブックです。「他の人の幸せを自分の幸せだと感じる人＝地球市民」に世界中の人がなることを目標とする地球市民の会としては、「せめて私だけでも」未来の子どもたちのために活動する人がひとりでも増えると、とてもうれしく思います。

このアクションブックは多くの方々のご指導とご協力によって完成しました。特に、山口知事をはじめ佐賀県のご協力なくして完成しませんでしたし、制作に関しては『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』を発行した一般社団法人Think the Earthの力が欠かせませんでした。また、取材や制作に関わるすべてのみなさまのサポートやアドバイスも大きな力になりました。心より感謝申し上げます。

最後に、この冊子は、佐賀県ふるさと納税CSO指定の「SDGsを通じた次世代の人材育成」に対しての多くの方々からのご寄付により作成されました。ご浄財に対しても、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

認定NPO法人 **地球市民の会**



SDGsアクションブックさが 《 地球市民の会 》

ただ与えるだけでなく ともに学び、分かち合う



現地にリーダーを育てて循環型農業を広める

「食べ物を与えるより、食べ物のつくり方や料理方法を教えてほしい。そうでないと、私たちの民族は、口をあけて待っているだけの人になってしまうから」。タイやスリランカへの国際協力などを行う地球市民の会のメンバーは、ミャンマーの少数民族パオ族のリーダーのその言葉がきっかけで、ミャンマーへの支援を決めた。この地域ならば、人々と協力し、学び合いながら進んでいけると確信したからだ。

教育支援やインフラ整備などさまざまな活動の中でも、特に力を入れているのが循環型農業の指導。ミャンマーでは急激な人口増加でプラスチックごみの量も増え、環境汚染が懸念される。このままだと自然が減り、農業などが困難な貧困地域に戻ってしまう。そこで、自然への負荷を少なくした有機農法で農産物を育て、環境を守るための知識も伝えている。

現地の事務所ではミャンマー人スタッフが働く。循環型農業の研修を受け、その知識を地域住民に広めることがミッションのひとつ。スタッフの中にはやがて村長になった人もいる。こうしたリーダーの育成により循環型農業は着々と広がり、現地の人々が主体的に取り組むまでになっている。

地球市民とは、遠い国の幸せを自分の幸せと感じる心を持つ人のこと。そんな人が日本に増えれば、地球も地域も良くなっていくに違いない。



〈左頁〉現地の高校生にも農業を教え、将来のリーダーを育てる 〈上〉農業指導だけでなく、自然を守るために植林活動も行う。植林のための資金づくりも地域で行えるようサポートする



SDGsアクションブックさが 《こどもおなか一杯便》

心とおなかを満たす 地域が届ける子ども宅食



地域の困りごとは、地域みんなで解決する

日本の子どもに、見えない貧困が広がっている。ただし、生活に最低限のものがなく、生きていくのも厳しいという状態ではない。金銭的な理由で進学ができない、習い事や部活、修学旅行に参加することができないなど標準的な暮らしが難しい状態の貧困である。これを相対的貧困という。その率は13.9%、7人にひとりの子どもが当てはまる計算だ。

佐賀市北川副小学校校区では、20%の子どもが就学援助を受けており、見えないが身近に相対的貧困家庭が存在している。こどもおなか一杯便は、子どもの「おなかが空いた」という辛い気持ちを少しでも減らしたいと思い、2ヶ月に1回、お米や飲み物・料理のしやすいレトルト食品など10kgを支援している。定期的な食品の配送は、家庭の楽しみでもあり、安心感につながる。

食材は地域のスーパーなどから購入し、配送は専門の運送業者が担う。地域の人々の力で、子どもたちを支えるシステムが成り立っているのだ。

貧困に伴うのは、経済的な困難だけではない。地域とつながりができず、社会的な孤立を生むこともある。だからこそ、子どもと親にとって、助けてくれる人がいるという「つながり」を感じられることは、単に食品の支援にとどまらない大きな意味があるのではないだろうか。



(左頁)各家庭へ送る食品の箱詰め・発送作業も、地域のサポーターが集まって行う
(上)ひと箱ひと箱にメッセージを添えて発送する



SDGsアクション⑩さが 《看護小規模多機能むく》

あかちゃんから高齢者まで 家族のように助け合う場所



子連れ出勤でお母さんも高齢者も元気に

幼い子ども、高齢者、障がい者、病気を患っている人など、社会には誰かの助けを借りないと生活できない人がいる。保育園や介護施設などサポートをする施設はあるが、みんなと一緒に過ごす施設はほとんどない。

看護小規模多機能むくは、助けの必要な高齢者が過ごす場所だ。他と違うのは、幼い子どもと一緒に過ごしていること。むくでは、未就園児を持つお母さんもスタッフとして働けるよう、子連れで出勤することを歓迎している。子どもたちは高齢者とともに折り紙などで遊んだり、お母さんの真似をして配膳の手伝いをしたりと、まるで家族のような雰囲気だ。

むくで過ごす高齢者は、体の機能が衰えてしまった人が多い。けれど、子どもたちのお世話をしたり一緒に食事をしたりして機能が回復することもある。子どもたちがいることで大人も助かる。子どもたちは“スタッフ”として活躍しているのだ。

また、むくは地域に住むあかちゃん連れのお母さんを有償ボランティアとして迎え入れている。高齢者はあかちゃんから生きるパワーをもらい、お母さんはお手伝いをすることでリフレッシュできる。

子どもたちの成長をみんなで見守り喜び合い、お互いが助け合って生きる。むくの姿はこれからの福祉のモデルになるかもしれない。



〈左頁〉子どもたちの動きを助けることが高齢者のリハビリにつながる 〈上〉施設の一角には週末のみ開店する駄菓子屋があり、地域の子どもたちが訪れてにぎやかになる

SDGsアクションブックさが
《 佐賀星生学園 》

誰もが安心して
成長できる学校を目指して



まずは居場所づくりから、一人ひとりの自立を

誰だって自分に自信を持てなくなったり、踏み出すことが怖くなったりすることがあるだろう。そんな子どもたちの声に耳を傾け、真摯に向き合う学校がある。それが佐賀星生学園だ。

星生学園が行うのは、誰もが安心し、安全に通い続けられる学校づくり。「個人の自立のないところに社会における自立はない」という考えのもと、教育のユニバーサルデザインを目指している。

カリキュラムは、安心できる居場所づくりから。生徒たちの多くは中学時代に不登校を経験し、学校生活やコミュニケーションに不安を感じている。そのため、クラスでの協働活動やワークショップなどを通して、お互いの距離を少しずつ縮めていく。普段の授業の中では、自己理解や対人関係を学ぶトレーニングが実践的に行われている。

学習や学校生活への不安感や恐怖感が取り除かれていくことで、生徒たちは、学校本来の楽しみを見い出していくのだ。

そして、それはやがて“用意された居場所”から“自らがつくる居場所”へと変化する。自らの居場所で、自分の強みを発見し、自信と誇りを持つことは、社会自立の第一歩。それぞれの強みを活かせる学校は、社会の中で子どもたちを誰ひとり置き去りにしないことにつながっている。



〈左頁〉年に一度行われる星生祭。展示や体験教室、ダンスなど 〈上〉 棚づくりを行う様子。オリエンテーションや授業のさまざまな工夫によって、学習や学校生活への不安感を取り除いていく

SDGsアクションブックさが 《 poco a bocco 》

地域の女性を支えたい 「共感」を原動力に働く



産前産後や子育て…悩む女性に寄り添う働き方

高校や大学などを卒業すると、ほとんどの人が社会に出て働く。ところが、「男は仕事、女は家庭」という考えがまだ根強く、結婚を機に仕事を辞める女性は少なくない。ここ佐賀県も同様で、全国的にはやや良いほうだが、家庭を持つ女性は働いてもやりがいを優先しにくいのが現状だ。女性は結婚だけでなく、妊娠・出産や更年期など、体に大きな影響をもたらす転機がたびたびある。それらの中で、出産前後に体に大きな負担を受けたり、子どもに障がいがあったりなど、大変な思いをする人がいる。そうした人たちが自分と同じような人たちの支えになりたいと活躍する場が、佐賀市にある **poco a bocco** の拠点「ポコハウス」だ。ここに講師として集う女性たちは、助産師や歯科衛生士など、これまでの経験を強みにさまざまな講座やイベントを開いている。

特に目立つのが、出産前後の母親をサポートする取り組みだ。出産後、あかちゃんの育児をする中で悩んだり孤立したりしないよう、女性を体調面でケアしたり、育児の知識を伝えたりしている。また、生きる上で大事な食事についてを学べるよう子ども向け食育スクールも行っている。

子育てなど家庭のことも大事にしながら、誰かの支えになりたい想いをかなえる…そんな働き方がここにはある。



〈左頁〉子育てや健康づくりのための講座、産前産後ケア、リンパドレナージュなど、さまざまな事業を行うほか自主イベントも開催する 〈上〉子ども食育スクールのワンシーン





SDGsアクションブックさが 《佐賀市下水浄化センター》

下水をきれいな水に変え 漁業や農業も元気に



逆転の発想の下水処理で有明海の手も一役

下水浄化センターには、私たちが生活する中で使った水の汚れをきれいにする役割がある。**佐賀市下水浄化センター**で浄化された水は、センターのすぐそばにある本庄江^{ほんじょうえ}に放流されたのち有明海に注がれる。有明海の名産である海苔の生産者は、この放流水が増えることで海中の養分が薄まり、海苔が養分を十分に得られなくなって生産に影響が出るのではないかと心配していた。

下水をきれいにして海に返すべく日々仕事していた職員は、「海苔の名産地にある施設にできること」を考え、研究した。その結果、海苔の養殖期間である11月から3月にかけて、海苔の養分となる窒素をなるべく取り除くことなく有明海に放流するようにした。下水の成分は日々異なるが、職員が水質計測機器を24時間体制で監視して管理することで水質を保っている。その苦勞の甲斐あって放流水の影響なく海水の窒素濃度は保たれ、佐賀の16年連続となる海苔生産売り上げ日本一に一役買っている。

センターではこの他にも、水をきれいにする過程で出る汚泥を発酵させて肥料をつくり農業の活性化に役立てたり、汚泥処理で発生するガスを使って自家発電を行ったりするなど、「迷惑施設」と呼ばれる施設から、資源やエネルギーを取り出し、歓迎される施設に転換しようとしている。



〈左頁〉施設の全景。写真左奥に有明海が広がる 〈上〉中央監視室では職員が水質を24時間体制で監視する

SDGsアクションブックさが 《GOOD ON ROOFS》

屋根を借りて電気をつくり 途上国にもあかりをとます



太陽光発電の利益でアフリカの学校の電化支援

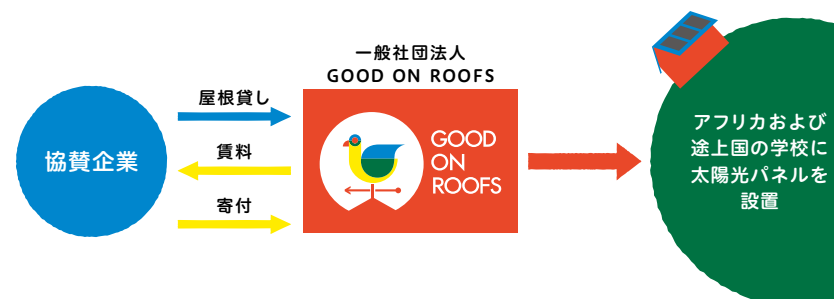
工場などの広い屋根は太陽の光を日々たくさん受け止めている。太陽光発電をするには理想的なスペースなのだが、実際にはそうした屋根の大半は、活用されていない。

その屋根を活用してクリーンなエネルギーができればいい。それが遠い途上国の人たちに電気を届けることにつながれば、もっといい。そんな仕組みを実現するプロジェクトがある。

GOOD ON ROOFSは、企業や工場の使われていない屋根に太陽光パネルを設置して、電気をつくって販売。利益の一部でアフリカの学校に太陽光パネルなどを寄付し、学校で電気を使ったり、学校で充電した照明を家庭で使って生活できるよう支援する。

先進国に住む私たちが、電気に依存した生活をしている一方で、世界の5人に一人は電気のない生活をしている現実がある。世界の誰もが電気のある生活を、この先もずっと送れるようにするためには、枯渇のおそれがないクリーンなエネルギーの活用が不可欠だ。

太陽光でつくった電気を、私たちがもっと使う。世界のより多くの人が見えるようにする。その2つを同時に可能にするこの試みは、まだ光が届いていない人たちと、私たち自身の未来の両方を照らすものになる。



〈左頁〉西アフリカのベナン共和国で行われたプロジェクト
 〈上〉GOOD ON ROOFSは屋根を貸してくれた協賛企業に賃料を払う。その賃料から寄付をもらい、途上国の学校に太陽光パネルを設置している



SDGsアクションブックさが 《大町自動車学校》

一人ひとりの自由度を高め 変化に対応する組織を築く



従業員の幸せが会社の成長につながる

さまざまな分野で技術がめざましく進歩している今、自動車業界では自動運転が現実的となっている。そんな中、**大町自動車学校**はこれまでの自動車学校のあり方を変えようとしている。

特に大切にしているのは、「従業員が幸せである」こと。例えば、従業員の個性を重視し、一人ひとりの意見が通りやすい雰囲気をつくり出している。また、働き方の自由度を高めるため、働く時間を調整しやすくしたり、会議の方法を変えたりした。特に会議は事前に話し合うべきことを明確にし、データに基づく議論をするために電子掲示板を活用している。

新しい仕組みを導入したことで、従業員からの提案による新規事業が次々と生まれ始めている。キッズバイク教室やドローン教室など、自動車教習の枠にとらわれない取り組みが実現し、働く楽しさ、地域や他企業との連携につながっている。

2019年、同校は水害により甚大な被害を受けた。校舎1階部分は浸水し、教習車のほとんどが壊れてしまった。そんな絶望的な状況の中、従業員は一丸となって復旧に取り組んだ。この経験が組織の結束をさらに強め、より良いチームワークができた。その組織力を活かし、時代の変化にすばやく対応できる会社になりつつある。



〈左頁〉会議の議事録は社内SNSで共有し、着実に実行につなげる 〈上〉水害でほとんどの教習車が壊れたため、九州各地の自動車学校から教習車を借りるなどして再建に努めている

SDGsアクションブックさが 《 Code for Saga 》

ICTと市民の知恵で 地域の課題を解決する



シビックテックで、地域に革新を

高齢化や人口減少、自然災害への備えなど、地域にはさまざまな課題がある。それらを解決するのは、誰だろう。国、行政、企業…あらゆる単位で課題解決が行われる一方、市民一人ひとりの知恵を持ち寄ることはできないだろうか。ICT（情報通信技術）と市民の力を活用して、地域の課題解決を探る活動。それは「シビックテック」と呼ばれる。

この活動は、NPO「Code for America」から始まり、2013年にはCode for Japanが設立された。現在ではCode for Saga、Code for Kanazawaなど日本各地にCode for Xが存在し、多くの市民が活動に取り組んでいる。Code for Sagaでは、テーマに沿ってアイデアを出し合うアイデアソンや、アプリケーション企画、設計、開発を短期間で集中して行い、成果を発表・競い合うハッカソンなどを行っている。2019年にはアーバンデータチャレンジin佐賀ハッカソンを開催。SDGs達成に向けたアクションの見える化ツール制作などのアイデアを練り、オープンデータを利用したアプリケーションの企画、設計、開発に取り組んだ。

Code for Sagaにはコードが書ける人も書けない人も、インターネットが得意な人もそうでない人も、興味があれば参加ができる。そのアクションが、地域の技術革新を前進させる一歩になるかもしれない。

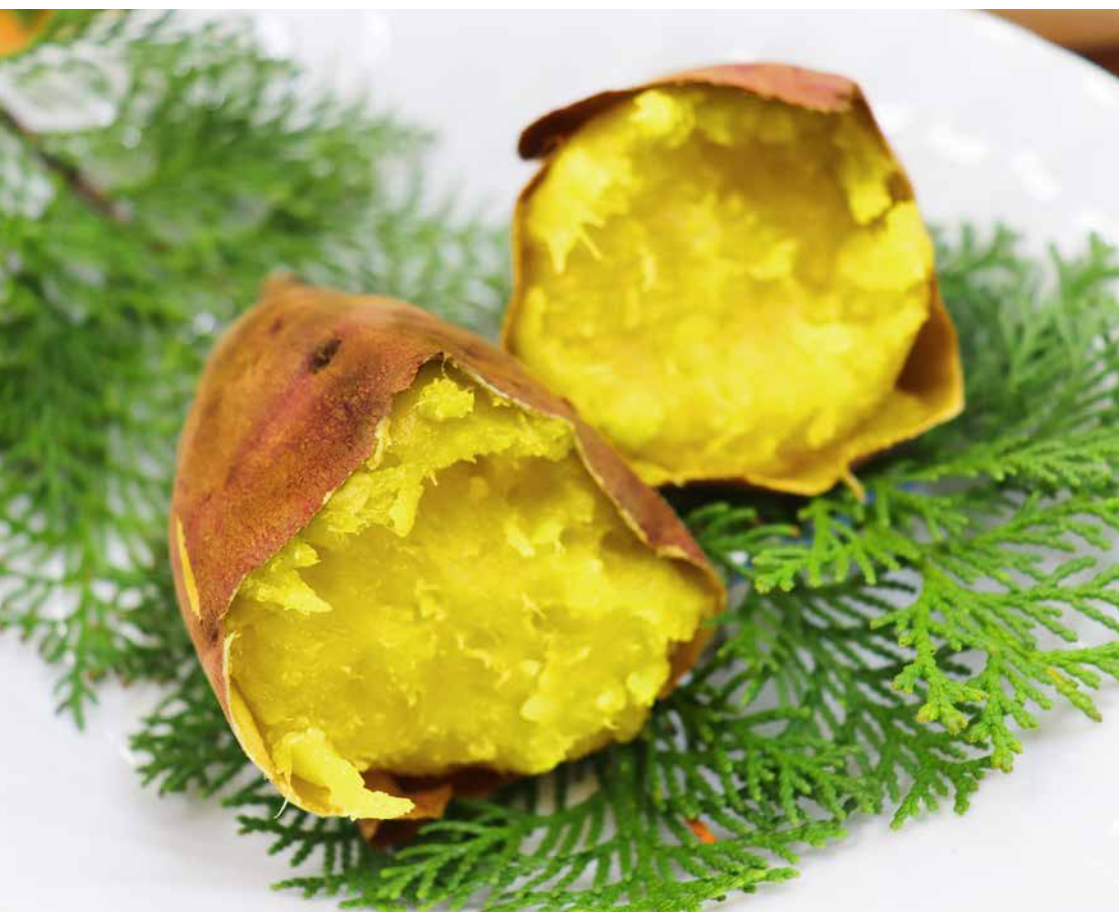


〈左頁〉勉強会の様子。佐賀市内外からメンバーが集まる 〈上〉アーバンデータチャレンジ2019 in 佐賀ハッカソンでは、アイデアの改善やデータ収集、アプリ制作などが行われた



SDGsアクションブックさが 《佐賀西部コロニー》

こだわりの農産物づくりで 誰もが自立できる社会に



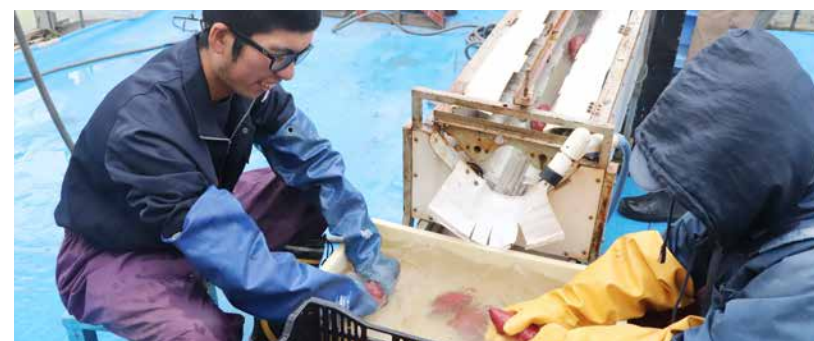
農産物のブランド力を高め、賃金アップを

スイーツのように甘い焼き芋ができる“奇跡のサツマイモ”として、メディアにも取り上げられた海水栽培のサツマイモ。多良岳山系の地下水^{ただけ}を使ってつくる肉厚のしいたけ。ミネラルたっぷりの海水を利用して栽培した甘いみかんと、それを加工したさわやかなシャーベット……。

これらは障がいのある人たちが暮らし、働くことを支援する施設、佐賀西部コロニーで生産・販売している商品だ。施設の利用者たちは、地域の農家と協力しながら農産物をつくり、加工や販売も行う。

彼らが働く喜びを得るとともに、経済的な自立を果たすためには、より高い賃金を得られるようにすることが必要だ。そこで施設が行うのは、収益が上がるような価値の高い農産物づくり。オリジナルの海水農法を取り入れるなど研究・開発の工夫により、ここにしかない生產品を次々と発信。全国から注文が寄せられる佐賀西部コロニーというブランドを築き、障がいのある人たちに支払われる賃金のアップを目指し続けている。

つくり出すものに工夫を重ねて価値を高め、ファンを獲得する。そこに着目したサポートが増えることで、誰もが自立できる社会につながるのではないだろうか。



〈左頁〉海水栽培のサツマイモは、焼き芋にすると糖度50度以上になり、テレビでも紹介された実績をもつ 〈上〉作業の様子。奇跡のサツマイモは「佐賀西部コロニー収穫祭」でも販売される



SDGsアクション⑩さが

《肥前浜宿まちづくり公社》

古いまちなみを活かして 人を呼び込むまちづくり



にぎわいを戻して住み続けられるまちを目指す

鹿島市の肥前浜宿^{ひぜんはましゆく}エリアに足を踏み入れると、まるでタイムスリップしたかのような錯覚におちいる。白壁の蔵や土間のある建物など伝統的な建物が連なり、着物姿の町人や武士とすれ違いそうな雰囲気だ。このエリアは江戸時代から昭和時代にかけて宿場町として栄え、多くの店が並ぶにぎやかなまちだった。交通手段が変わり人の往来が減った今でも、地元の人たちの努力で建物が保存され当時の面影を残す。その甲斐あって、国の重要伝統的建造群保存地区に指定されている。

ここで暮らす人たちは、まちの雰囲気をいつまでも残すため、建物を保存し、人が住み続けられるまちづくりを目指す。肥前浜宿はかねてより酒やしょうゆ、漬物といった醸造業が盛んで、今も発酵文化を色濃く残しており、これを活かしてにぎわいを戻そうと考えた。そこで肥前浜宿まちづくり公社を設立し、どうすれば多くの人が訪れるようになるか勉強会を重ねている。現在、蕎麦屋と2軒のゲストハウスを開業し、まちを訪れる人を出迎える。

まちづくりには、このエリアの雰囲気に魅了されて県内外から移住した若者も加わり、パン屋やろうそく職人などの商売で、まちの盛り上げに一役を買っている。歴史遺産と発酵文化に加わる新しい波。ここで魅力あふれるまちづくりが広がりつつある。



〈左頁〉白壁の蔵が並ぶ昔ながらのまちなみ 〈上〉年に一度、佐賀大学の留学生が一週間ほど滞在し、肥前浜宿の歴史やまちづくりについて学ぶなどして交流している



SDGsアクション⑫さが

《テムデサク》

予約を受けてから つくり始める洋菓子店



その人だけのためにつくるケーキ

人気の洋菓子店と聞けば、おいしそうなケーキが行儀良く並ぶ大きなガラス張りのショーケースを、誰もが思い浮かべるのではないだろうか。テムデサクにはそのような冷蔵のショーケースがどこにもない。開店当初より、生ケーキの販売は完全予約制だ。

お店を始めるにあたって、店主の次富あすかさんは「おいしいものをつくって届けたい」そして「つくったものは全部食べてもらいたい」と考えた。つくり手にとっては純粋な、当然の気持ちだ。加えて、身体に優しいお菓子を届けたいという考えで、素材にもこだわっているため、どうしても原価がかかる。悩んだ結果、食品ロスを減らすことでコストを抑える生ケーキの受注生産という方法を選んだ。これは、訪れる客にも多少手間がかかる方法だ。予約なしに来店しても生ケーキは並んでいない。開店当初は戸惑う客もいたが、今ではすっかり浸透してきたと感じるという。

お店では、マクロビオティックの講師を毎月招いて料理教室を開催している。次富さんはデザートを担当。講師が伝える「その土地のものを食べ、生活する」という考えは、共感することのひとつだ。

今の時代は、店頭に行けばいつでも整然と豊富な商品が並び、選んで買うことができる。ただ、その便利さの裏には、たくさんの食品ロスが隠れている。それは、提供するお店側や消費者の意識次第で変えられる問題だ。



〈左頁〉古民家を改装した店舗。週末のみカフェを営業 〈上〉完全予約制でつくるケーキ。地産地消を心がけ、オリジナルケーキや植物性素材のみを使うマクロビオティックのケーキにも対応する



SDGsアクションブックさが

《佐賀大学 海洋エネルギー研究センター》

海の「温度差」から エネルギーを生み出す



海に眠る、膨大なエネルギーの可能性

自然エネルギーの活用は、私たちが持続可能な生活を送るための大きなカギを握る。太陽光エネルギーは自然エネルギーの代表例だが、地球上にはまだまだ利用されていないエネルギーがある。「海洋エネルギー」はそのひとつ。海の温度差を利用したり、波の力を利用したりすることで、エネルギーをつくり出すことができるのだ。

佐賀大学 海洋エネルギー研究センターは、日本で唯一の海洋エネルギーの総合研究拠点。ここで特に力を入れて進められているのは、海洋温度差発電の研究だ。浅い海と深い海の温度を比べると、かなりの温度差があり、この差を利用することでクリーンなエネルギーを得ることができる。

海はいつでもそこにある。海洋発電は自然エネルギーの中でも天気によ左右されない発電方法であるため、年間を通して安定した発電ができるのも、大きな特徴だ。日本の経済水域内には、石油約86億トン相当の海洋エネルギーが眠っていると考えられている。現在は、この技術の実用化に向けて、沖縄県・久米島で実証試験が進む。

私たちの日々に欠かせない電力。一方で、まだまだ多くの国・地域が、地球に負荷の高い発電方法に頼っている現状がある。海に眠る膨大な自然エネルギーの研究が進むことで、私たちは気候変動に立ち向かうことができる。



〈左頁〉1MW級設備の導入を想定し行われる実証試験。久米島町は沖縄本島と電源系統が接続されていないことから、エネルギー自給率100%を目指す 〈上〉研究を行うための基礎実験装置



SDGsアクションブックさが 《佐賀ん海苔漁師》

日本一の海苔づくりのため 有明海の美しさを守りたい



植樹活動を続けて海だけでなく山や川も守る

佐賀で採れる海苔は全国の総生産量のうち4分の1を占め、全国一の生産量を誇る。それは、干潮時と満潮時との潮位の差が約6mにもなる有明海の影響する。海苔を育てる網は、満潮時には海に沈んで海水中の養分をたっぷり吸収し、干潮時には海水から出て日差しを浴びて光合成を行う。それらを繰り返すことで、やわらかくて旨味のある海苔が育つのだ。

有明海で海苔を養殖すること40年。海苔漁師の川崎賢朗^{けんろう}さんは変わりゆく有明海を見つめてきた。昨今は気候変動や環境汚染などにより、海苔の成育に影響が出始めた。2000年に海苔が不作となったことを機に、海を取り巻く環境問題を意識するようになった川崎さんは、近隣の小学校で出前講座を行ったり、SNSを通して佐賀の海苔のことを発信したりして、海を守る人を増やすための活動を行っている。

さらには、年に一回、佐賀市富士町で地元の人と一緒に植林活動をしている。「川が十分な養分を運んでくれるためには、雨水が山にしっかりとしみ込んで、時間をかけて川となることが大事。そのためには森林が豊富でなくてはならないのです」。海苔は海の恵みだけでなく川や山の恵みも受けて育つ。おいしい「佐賀ん海苔」をつくるため、川崎さんは伝える活動を続けている。



〈左頁〉「海を守る大切さを伝えるためには、おいしい海苔をつくるのが一番大事」と話す川崎賢朗さん 〈上〉毎年3月に行われる佐賀市富士町での植樹活動

SDGsアクションブックさが 《 中村製材所 》

未来型の木のビジネスで 循環型社会をつくる



“木”の地産地消は未来への“気”づかい

人々は「木」があると癒され、落ち着く。しかしその素材の産地への関心はまだ薄いのではないか。日本の国土の約7割は森林だが、国内で流通する木材は北米、北欧、東南アジアなどからの輸入材が圧倒的に多く、国産材のシェアは3割程度だという。

環境や林業の未来を危惧した中村製材所は、2006年に県で初めてFSC®※による認証を受けた。九州電力や宮崎県諸塚村が管理するFSC®^{もろつかそん}認証森林から木材を調達し、客先にもFSC®認証材や地域材をすすめる。私たちがこれらを使用した製品を買ったり、建物に足を運んだりすることは、森林やその仕事に携わる人を守ることにもつながる。

ただ、木が育つには長い年月がかかる。中村展章社長は、ビジネスの視点からも林業や関連産業の持続可能な発展ができないかと考えた。そこで林齢30～40年の小径の木を使用する「SKINWOOD®」を開発。壁や家具材などに使える薄^{うす}い突板で、需要サイクルを早め収益を生み出す。

経済を安定させ森林も活性化させる循環型の豊かな社会をつくるべく、中村社長は早くから行動を起こしてきた。学生たちにも積極的に森林・環境教育を行う。私たちは、身近にある木や環境にも意識をおいて、未来を“気”づかうことが求められている。

※FSC®: Forest Stewardship Council® (森林管理協議会)…森林の管理や伐採が、環境や地域社会に配慮して行われている森林を認証する国際機関



〈左頁〉県内の公共機関や学校にも地域材を活用。薄い突板のSKINWOOD®を使用した例もある
〈上〉環境に配慮したグリーンストア1号店としてのスターバックス福岡大濠公園店の建築に協力した





SDGsアクションブックさが

《被害者支援ネットワーク佐賀VOISS》

被害者の声に耳を傾け 生きる力を取り戻す



犯罪による被害者を支援するサポーターを養成

「傾聴^{けいちよう}」という言葉聞いたことがあるだろうか。相手を理解し、気持ちをくみ取る聴き方のことだ。被害者支援ネットワーク佐賀VOISSはその傾聴を基本として、ニュースの画面からは伝わらない犯罪被害者の気持ちに寄り添う活動を続けている。

暴力や殺人、DVや交通犯罪…。被害を受けたことによる恐怖、生活上の問題、周囲の人たちの心ない言動、無関心など、当事者やその家族の苦しみは計り知れない。2000年に佐賀県でも重大な事件が起こり、その前から社会問題や被害者への対応を学ぶ勉強会を始めていた臨床心理士、医師、社会福祉士、弁護士、養護教諭などの有志たちが、団体を発足した。電話やメールでの相談、裁判や病院への付き添いなど、活動は多岐にわたる。自治体や警察と公的に連携しながら、具体的な支援にもつなげている。また、社会全体にもっと理解を深めてほしいと「犯罪被害者支援サポーター養成講座」を開く。「傾聴」を学ぶこともカリキュラムのひとつだ。

身の危険がない当たり前の生活を送る権利は誰にでもある。孤立し生きづらさを抱える被害者の声に耳を傾けるVOISSの活動は、相手の心の痛みを和らげ、日常と生きる力を取り戻すことにつながる。誰もが安心して暮らせる社会に向けて、支援の輪を広げている。



〈左頁〉専門的な訓練を積んだ相談員が被害者からの電話相談を受ける。被害内容は多岐にわたる
〈上〉県警と連携した啓発活動、被害者支援寄付型自販機の設置なども行う

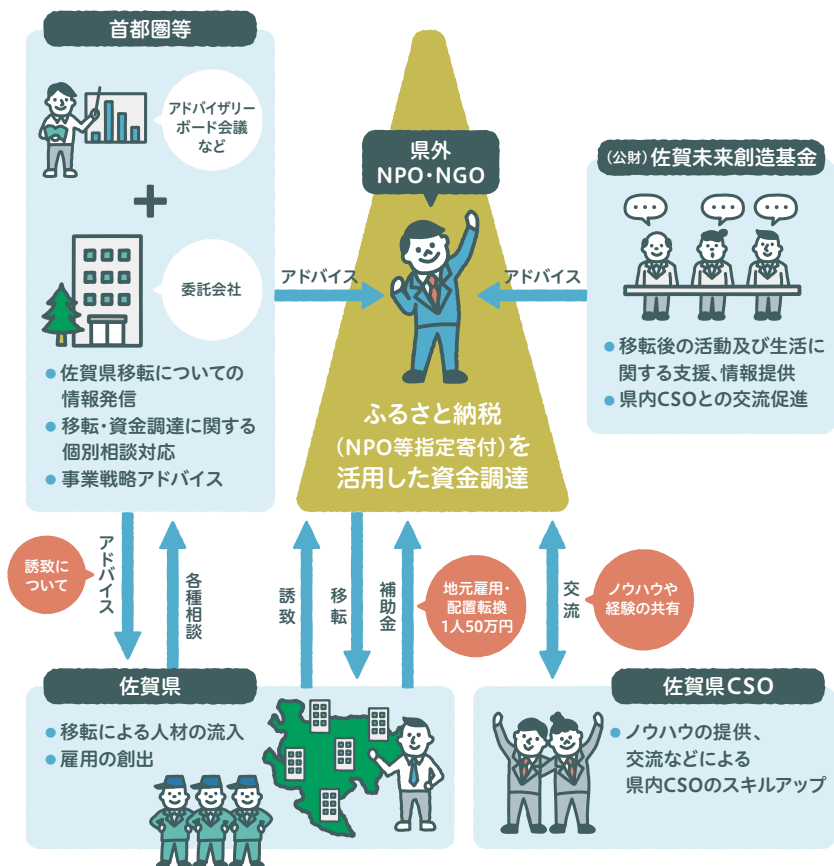




SDGsアクション⑩さが

《CSO誘致事業》

お互いに支え合いながら 高め合うモデルに



ふるさと納税を活用し県内外CSOの力を発揮

「地域がこうなったらいい」「困っている人の力になりたい」と理想や問題意識を持った個人が集まる市民社会組織(CSO=Civil Social Organization)が佐賀県にはたくさんある。防犯や防災、教育や福祉、まちづくりなど、それぞれの分野でCSOが活躍している。

県の県民協働課はCSO提案型の事業を広く募集し、より良い行政サービスや課題解決が見込めるものを協働で実施。また、佐賀県のふるさと納税では県内NPOを指定しての寄付も募っている。寄付額の95%を活動資金に充ててもらうとともに、団体の活動の周知や支援へとつなげる。

特にユニークな取り組みが、他県に先駆けて始めたCSO誘致事業だ。県外で活動するNPOやNGOを呼び込み、地域活性化や県内CSOのスキルアップに役立てる。ふるさと納税での資金調達、佐賀での雇用や配置転換に対する補助も魅力的だ。事業面、生活面でのアドバイスを行い、外から内から活動しやすい環境を整える。団体間の交流チャンスも多い。

この大胆とも思えるプログラムが功を奏し、県外に拠点を持つ8団体が佐賀に進出し活動している。佐賀県にこれまでになかった考え、手法など新しい風を取り入れ、地域社会のパートナーシップが強まっている。

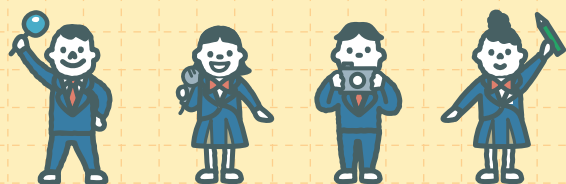
「何かアクションを起こしたい」。そんな願いを佐賀で実現できそうだ。



(左頁)佐賀県外のCSOを積極的に誘致。県内CSOや行政との連携を強め、地域課題の解決を目指す (右)県内外のCSOが集まる交流会 (写真:佐賀未来創造基金)

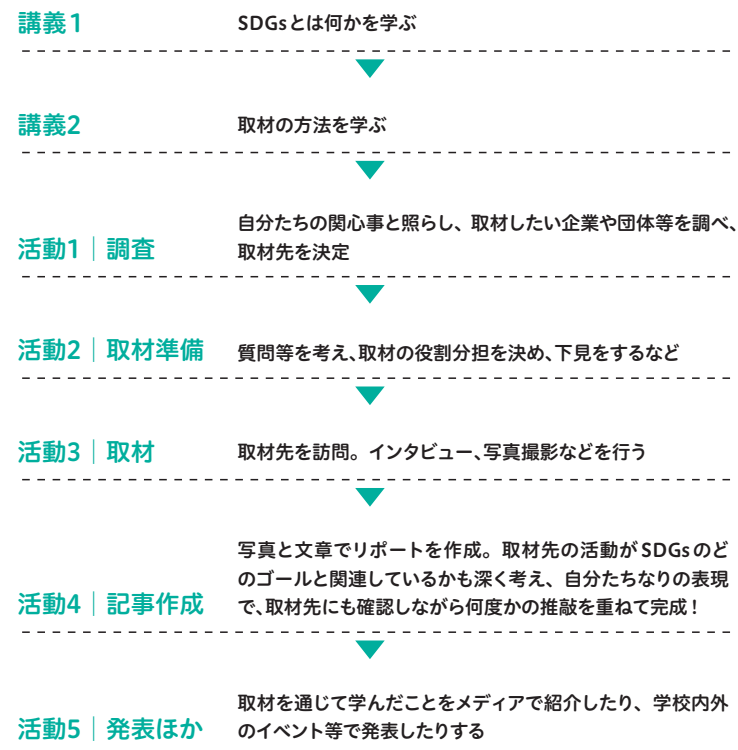


中高生による SDGsアクション・レポート



持続可能な社会に向けて「未来を変える」原動力となる子どもたちが、地域で社会課題と向き合いながら活動する大人と出会う探究学習の一環として、中高生が担当するページをつくりました。地球市民の会と「SDGsの教育推進に関する連携協定」を結んでいる龍谷中学校・高等学校の中学生1チーム、高校生2チームの生徒さんたちが、佐賀県内の企業や団体の活動取材してくれました。

次ページからの取材記事は、
以下のような学びのプロセスを経てつくられました。



龍谷中学校・高等学校では「私たちが未来を変える！」「50センチのチェンジメーカーになろう！」を合言葉にSDGs教育を推進しています。今回の取材を通じて、生徒たちは「訪問先の企業等を応援したい、一緒にSDGsを推進したい」という気持ちを強く持つようになりました。県内各学校のみなさん、私たち龍谷中高生と一緒にSDGsアクションプランを企画し実行しましょう。(龍谷中学校・高等学校 副校長 陣内陽子)



川崎空間研究所

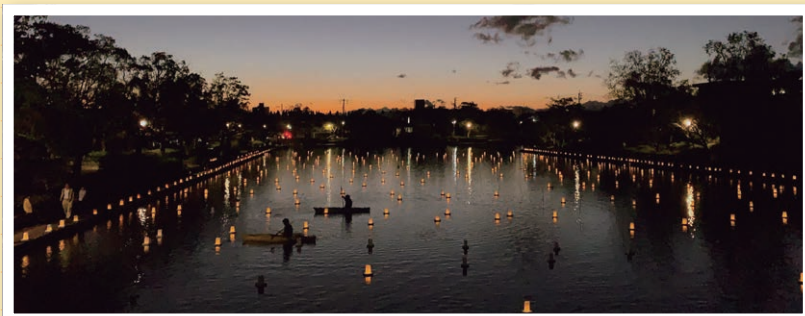


レポート：龍谷中学校1・2年生「チームSDGs」

佐賀の木材を活用した建築

一級建築士で川崎空間研究所社長の川崎康広さんは佐賀の木材を活用した建築に積極的に取り組んでいます。お話を聞いてみると、佐賀は全国の中でも人工林の数が多いということがわかりました。密度が高く、輸送コストがかからないこともあって、昔の人が60年後のために植えてくれた佐賀の木材を使おうと川崎さんは考えました。また、川崎さん自身が東京での生活を経験したことで、佐賀には歴史的に価値あるものがたくさん残っていることに改めて気づき、佐賀ならではの建築物を設計しました。

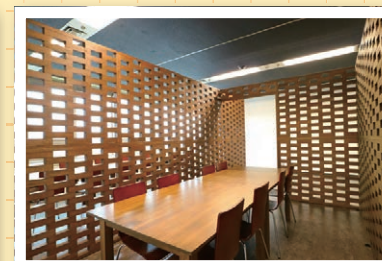
その代表的な例として、佐賀県庁の本館1階にある面談室「EN-えん-」は、佐賀の空気で育った木と佐賀の文化と佐賀の技術が活かされています。新館10階面談室「TSUM-つむ-」では、先人から受け継いだ佐賀の山林で生産された木材を使っています。



みずがけ
佐賀城お濠で開催される毎年恒例の水鏡プロジェクト。赤松公民館や佐賀県建築士会が中心に実施する。2019年は私たちも参加した。地域の人と協力しておかれる灯籠はとてもきれいだった

SDGsとの関連について川崎さんは、「建築はSDGs17のすべての目標につながっていますが、中でも特に目標11『住み続けられるまちづくりを』や、目標14『海の豊かさを守ろう』、目標15『陸の豊かさを守ろう』が特に関連が深い」と言います。

私たちは、川崎さんが佐賀の木材を活かす建築物を創り出そうとする情熱に心を打たれました。そして、私たちの生活に欠かせない建築の仕事はSDGsの推進にも深く関わっていると改めて気づかされました。



川崎さんが設計・監理された佐賀県庁にある面談室「EN-えん-」と「TSUM-つむ-」。佐賀で生産された木材が使われている



中学生チームメンバーと龍谷高校OBでもある川崎さん。右端は副校長の陣内陽子先生

川崎さんの職場である川崎空間研究所にて取材した



佐賀の“財”クリークの活用

川崎さんが代表を務める市民団体「さがクリークネット」は、佐賀にもともとあるものを磨きたい、つまり、佐賀にはクリーク(水路)がたくさんあってそれを活用することで、もっと生活が豊かになるのではないかと考えたそうです。昔はクリークを使って洗濯をしたり船で移動したりしていました。クリークは汚いものではなく、自慢できるものだったのです。そこで、クリークの堀を取り払って、最大限に活用するさまざまな取り組みを企画しています。

「さがクリークネット」のスローガン「裏を再び表へ、歴史を未来へ」には、今の佐賀ではクリークよりも道路の方に道や家が開けているけれども、昔のように生活の一部にしようという想いやクリークの歴史をこれから先、未来へ活かしていきたいという願いが込められているそうです。

佐賀にはクリークをはじめ、たくさんの資源があります。それらを活用することがまちの活性化につながると川崎さんは考えています。緑と水がたくさんあふれている佐賀は、人は少ないけれどゆったりとした高級別荘地のようになれる、そして、クリークや資源の活用をきっかけに大勢の人から魅力を感じてもらえるような暮らしができる、豊かな地域づくりを目指しているそうです。

私たちは今回の話を聞いてクリークについて興味がわき、クリークに対する考え方が変わりました。今後、クリークに目を向けて少しずつ自分たちの生活の身近なものにしていきたいです。



2016年5月14日に裏十間川で行われた和船&カヤック体験の時のもの。川でカヤックなどに乗ることができる



2018年7月15日に裏十間堀川で行われた「水辺で乾杯」



今のクリークの地図。全長2,000kmものクリークが佐賀城のまわりにある。これを活用していかなければならない



2019年10月14日開催のワークショップでカヤックを使ってクリーク探検を行う川崎さん

わたしたちにできること 「知る」から「考える」そして「行動」へ

私たちは今、SDGsについての勉強をしたり、いろいろな取り組みをしたりしています。他の学校の中学生よりもSDGsについて理解していると思います。だからこそ、私たちができることは、SDGsについて「知る」だけでなく自分たちにできることを「考える」ことだと思います。考えれば「行動」に移すことができます。



川崎さんは、「自然も山から川、川から海、海から山へとつながっている。SDGsの17の目標も同じようにすべてつながっている」と言われました。私たちもみんなで協力して、龍谷中学校・高等学校だけでなく、自分たちの周りの人たち、佐賀県中の人たちにもSDGsを広めて、未来を変えていくための大きなひとつのつながりをつくっていきたいです。

取材チーム:(2年生)岩野凜 古川麗音 宮国輝弥 (1年生)岡夏末 吉田理沙子

サガン鳥栖



レポート：龍谷高等学校 1年生チーム「サガン鳥栖がんばれ」

サガン鳥栖があるまち

限界を超えてのプレー、試合が終わったとたんに選手全員がピッチに倒れこむようなプレーを称賛するサガン鳥栖は、チーム名にもあるように「砂岩=小さな石のような粒でも集まり力を合わせれば大きな岩になる」をモットーに頑張っています。

SDGsのゴール3番「すべての人に健康と福祉を」に関連してサガン鳥栖が力を入れていることは、ホームスタジアムでの健康への配慮です。「世界一安全なスタジアム」の実現を目指し、ドクターの配置、AEDの設置など、選手にもサポーターにも医療と安全を届けられるようにしています。

©SAGAN DREAMS CO.,LTD.



コンコースをぐるりと一周できるホームスタジアム。2019年に「世界一安全なスタジアム計画」を始動した



取材に応じてくださった株式会社サガン・ドリームの竹原総社長



佐賀県庁の会議室で取材させていただいた。右端はサガン・ドリームス営業本部の永井隆幸さん



佐賀県内のすべての小学1年生にサガン鳥栖のマスコットキャラクター、ウイントスクンのランドセルカバーを贈る。交通安全に役立てるとともに、チームへの興味をわかせる

©SAGAN DREAMS CO.,LTD.

また、駅前不動産スタジアムは、Jリーグでは珍しくコンコースを一周できるスタジアムでもあります。ホームサポーター域とアウェーサポーター域の行き来ができることで、みんなが同じグルメやイベントを共有でき、心の豊かさが生まれます。このように身体・精神両面の安全・安心に配慮しています。

サガン鳥栖は、その存在自体がまちを元気にし、県民の「共通言語」となることを目標にしています。それは、サガン鳥栖の話題でコミュニケーションが増え、まちが活発になることを意味します。サガン鳥栖の試合や取り組みを通じて、さまざまな感情を共有することは、スポーツ文化の発展にもつながり、県民の団結心も高まるのではないのでしょうか。

このような企業が増えるとさらにSDGsにつながる活動が活発になるので、私たちもサガン鳥栖の地域貢献に積極的に参加したいと思いました。

とものつくり、豊かなパートナーシップのまち、佐賀を！

サガン鳥栖は地域の各小学校にチームのマスコットキャラクター・ウィントス君のランドセルカバーを配布したり、サポーターたちが地域のごみ拾いをしたりしています。厳しい状況にある子どもたちを招待したコンサート活動もあります。

また、環境に配慮していく中で、スタジアムでのプラスチックコップを廃止してはどうかという考えから、マイボトルをつくる計画もあります。今後はSDGsのゴール17個全部とはいきませんが、多くのゴールに関わるアクションプランを立てるそうです。

SDGs達成をめざす2030年までに、佐賀がどんなまちになってほしいかチームの運営会社サガン・ドリームスの竹原稔社長に聞いてみると、「佐賀がみんなの住みたいまち、人口が増えるまちになってほしい。そのまちづくりのためにサガン鳥栖が行っている『ことづくり』や『ときづくり』と一緒に取り組んでほしい。そのためにもSDGsの17個のゴールを具体的なアクションプランに落とし込むことは効果的。なぜ？それは、笑顔あふれる人、人や環境に優しい人、健康的な生活をする人、おいしく食べる人、心の豊かさを求める人、そんな人たちが集まってSDGs最後の17番目のゴール、豊かな『パートナーシップ』が生まれるまちづくりが一緒にできるから」とおっしゃいました。

取材を終えて、サガン鳥栖の存在が佐賀のまちに大きな影響を与えていると改めて感じました。そしてサガン鳥栖と一緒に何かを始めたいと思いました。



サガン鳥栖では「アシストクラブ」として毎試合多くのボランティアが集まって試合の運営を手伝っている

©SAGAN DREAMS CO.,LTD.

©SAGAN DREAMS CO.,LTD.



多くの人が集まるスタジアムで募金活動も行っており、「ネパール大地震支援募金活動」では合計で931,661円の救済金が寄付された

わたしたちにできること SDGsがより身近に

サガンドリームスは、プロサッカーチーム運営というスポーツ事業だけでなく、さまざまな地域貢献事業にも取り組んでいます。それは、SDGsのゴール17番「パートナーシップで目標を達成しよう」にも重なります。だからこそ地域の方々へのあいさつやちょっとした声掛けなどが大切だと感じました。また、今回の取材で、竹原社長は「サガン鳥栖と龍谷中高と一緒にSDGsアクションプランを考えたい」と話してくださいました。実現できれば、より多くの人たちにSDGsへの関心を持ってもらえると思います。私たちはこの取材を通してSDGsをより身近な問題としてとらえることができました。

取材チーム：河野康晴 金子友彦 古賀啓太 内田真緒 北村彩華



東よか干潟



レポート：龍谷高等学校 2年生チーム「干潟を守るには」

東よか干潟とは

東よか干潟は、有明海の北岸に位置する佐賀市の東与賀海岸に広がる干潟です。干潮時には見渡す限りの広大な干潟が姿を現します。

干潟には、ムツゴロウやワラスボ、シオマネキなど有明海の泥干潟特有の生物や、クロツラヘラサギ、ズグロカモメ、ツクシガモなど絶滅危惧種を含む水鳥類が多く生息しています。この自然環境を保全するなどの目的から、東よか干潟は2015年5月、ラムサール条約湿地に登録されました。

ボランティアによる環境保全活動

シチメンソウは、絶滅が危惧されている貴重な塩生植物です。成長の過程で色の変化が見られ、秋には海岸を真っ赤に染めます。その様子は「海の紅葉」とも言われています。

東与賀町では毎年その時期にシチメンソウまつりが行われており、他県からも観光客が訪れます。しかし、ごみや流木などの影響でシチメンソウが紅く色づく前に枯れてしまい、年々その数が減少しているという現状があります。地球温暖化などいろいろな原因が考えられるそうです。

シチメンソウを守るボランティア活動を続けているのが、「シチメンソウを育てる会」と「東与賀まちづくり協議会」の方々です。ごみ拾いなど清掃活動のほか、種取りや種まきを長年にわたり行っていますが、なかなか改善に至っていません。環境の大切さを伝える啓発活動も行われています。一人ひとりが環境を悪化させないようにすることが大事だと言われていました。



東与賀海岸に群生しているシチメンソウ



東よか干潟の美しい夕暮れ



東よか干潟には9月～5月頃にかけてたくさんの野鳥が渡来します



今回お話を伺った佐賀市役所東与賀支所の原口謙一郎さん、シチメンソウを育てる会会長の石丸義弘さん、東与賀まちづくり協議会会長の東島清司さん(右から順に)

干潟のごみ問題とSDGs

東よか干潟のごみ拾い活動には年間1,800人程度が参加し、約13トンのごみが集まります。集まるごみにはペットボトルなどの人工物のほか、流木などの自然物の漂着が多いそうです。また、家庭で使う洗剤や化学薬品が海に混じってしまうことも問題です。そのため、干潟に来る野鳥がケガをしたり、誤飲をしたりするなどの被害をもたらしています。

私たちも干潟のごみ拾い活動に参加しました。その時には、流木がほとんどで、1時間でごみ袋2枚分がいっぱいになりました。大きな流木があったときは危険を感じました。SDGsのゴール14の「海の豊かさを守ろう」、15の「陸の豊かさを守ろう」の達成に大事なことは環境を汚さないことです。そして、すべての人が環境に優しくなることだと思いました。

もっと多くの人に干潟のごみ拾いに参加してほしいです。

「シギの恩返し米プロジェクト」の活動

シギの恩返し米プロジェクトとは、米などの“ラムサールブランド化”を通し干潟に渡来する渡り鳥や生きものとの共存を目指していく取り組みです。東よか干潟付近の農地で、農薬や化学肥料を50%以上減らして栽培している米は「シギの恩返し米」と名づけられ、県が特別栽培農産物として認証しています。佐賀県版GAPといった農業生産工程管理の認証も取得。安心安全で持続可能な農業が進められています。

しかし課題もいくつかあります。農家にとってはこれまでの栽培方法を見直すとともに、イベントへの出店など、シギの恩返し米を多くの人に知ってもらい、販売数も増やしていかなくてはなりません。このような課題を解決するためには、私たちのような若者が動くことも必要だと言われていました。



2019年8月に東よか干潟で行われたごみ拾いの様子



2019年佐賀豪雨の後に東よか干潟に漂着したごみ



シギの恩返し米。人や生きものや自然環境が共生し、美しい自然を未来につないでいくための取り組みの一環で生まれた

わたしたちにできること 干潟を守るために

有明海の沿岸のまちに育った私たちは東よか干潟について調べ、その魅力を広めるために「干潟新聞」を制作してシチメンソウまつりで配布したり、ごみ拾いに参加したりしました。東よか干潟はとても素晴らしい所ですが、今回の取材を通して、たくさんの人の協力やボランティア活動によって今の干潟があると感じることができました。これからもごみ拾い活動に積極的に参加するなど、小さな活動を続けながら、干潟を守っていきたいと思います。



取材チーム：松枝光 古田明日香



私たちが発行した「ほっとけない干潟新聞」



中高生が知事に質問してみました!

県内の事例を取材(p40-53)した龍谷中学校・高等学校の生徒たちが、同校を訪れた山口祥義知事に佐賀県の取り組みについて聞きました。



SDGsで特に重視していることはありますか?

知事: みなさんの未来のためにも気になるのが13番の「気候変動に具体的な対策を」ですね。さまざまな国や企業、団体が目標を掲げて取り組みを始めています。ここで一番大切なことは、具体的に何をするかということです。目標もさることながら、具体的な対策をひとつずつやっていくことが大切であると思います。

佐賀県には女子生徒の制服にスカートだけでなく、スラックスも採用している学校があると聞きました。5番のジェンダー平等推進についてどのように考えていますか?



知事: 性別も含め、障がいの有無、国籍に関わらず、「みんな仲間」として共に生きられる社会、どんな人もいきいきと暮らせる社会をつくってきたいです。スラックスやスカートを選択できるのもひとつのやり方。校則についても、見直した方がいいものもたくさんあると思います。生徒も自分たちで考えてルールをつくっていくくらいの気持ちが必要です。



14番の「海の豊かさを守ろう」に興味があり、近くにある有明海を守ることから始めたいと思っています。佐賀県で有明海を守る取り組みがありますか?

知事: 有明海では、毎年クリーンアップ作戦が行われています。まず、こうした催しに森川海人くん(p58)と一緒に参加してもらいたいです。海は、森や川とつながって生まれ、海を通じてたくさんの環境問題を考えることができます。森川海とのつながりを知り、山や森も大切にしていきたいですね。また、近年海洋プラスチックごみの問題が関心を集めています。対策を取らなければ、魚と同じ量のプラスチックが海に浮遊することになる可能性があるとか、怖くありませんか? ペットボトルなどのプラスチック製品の利用をなるべく減らすなど、できることから始めると思います。

夏に中学生主体で「SDGsフェスティバル」を開催しましたが、来校者が少なく、まだまだSDGsを知らない人が多いと感じました。SDGs推進についてどのような取り組みを行っていますか?



知事: 佐賀県は「人を大切に 世界に誇れる佐賀づくり」をスローガンに、さまざまな事業に取り組んでいますが、その多くがSDGsにマッチしています。例えば、「森川海人プロジェクト(p58)」は、森と川と海の関係者がお互いのことを理解し合い、山を大事にしていこうという取り組みです。また、県公式ウォーキングアプリ「SAGATOCO」(p59)は、「山を歩こう」などのイベントに行くとポイントが付与され、県内のお店で割引などのサービスが受けられます。健康にも良いし、まちづくりにもつながります。学生のみなさんに伝えたいのは、誰かが言っていることを何も考えずに手放しで受け入れないこと。いろいろなことを深く考えると、さまざまな問題について自分で考え、解決する力がつきます。まずはこの17個のゴールについて、何を意味するのか、なぜこれらのゴールが定められているのか、自分たちでできることは何か、自分で考えてみてください。



未来に向けて、佐賀を語ろう!

佐賀県知事 山口祥義

今すぐ気候変動対策を

2019年8月末に発生した佐賀豪雨は記録的な大雨となり、各地に甚大な被害をもたらしました。佐賀県では現在も復旧・復興推進本部を設置し、被災者に寄り添いながら支援に取り組んでいます。災害発生直後は、道路と田んぼの境もわからないほど浸水しており、雨が降り続く中、ヘリコプターも飛ぶことができず、事態の把握に苦労しました。とにかく人命を守ることを第一に対応することに集中しました。この方針は、今後の災害対応でも変わることはありません。ここ数年の世界を見ても、「災害が多すぎる」と感じており、地球温暖化への具体的な対策が急務です。誰もが「私ひとりではできることなんてない」などと考えていては、みんながダメージを受けます。だからこそ、環境問題などに対し、SDGsをはじめ共通のルールや考え方を持っておく必要があります。

市民団体の活躍が誇り

佐賀県ではさまざまな場面で、県内のNPOはじめ、CSOの方々が活躍されています。今回の災害でも消防や警察の方々がスピーディに救助にあられる一方で、CSOのみなさんの存在もとても心強く感じました。特に「被災者の方の話聞く」ことが大事で、一人ひとりの声を聞いて支援につなげるという得意分野が被災者の大きな助けになりました。私たちの体は血液が循環して動いていますが、血液が動脈、静脈それぞれの働きで機能するように、行政や企業、CSOがそれぞれの強みを活かしながら、お互いに情報を共有し、パートナーシップを強めることが大切だと思います。

佐賀を語ろう!

「肥前さが幕末維新博覧会※」でも紹介したように、明治新政府では多くの佐賀出身者が活躍しました。それは、出島のある長崎の隣にあって、世界の動きがよく見えていた佐賀が、日本をひとつにして西洋列強と肩を並べなければと考え、幅広い分野で必死に学んでいたからだと思います。さらに^{さかのぼ}遡れば、吉野ヶ里にも国の中心となる集落があったことがわかっています。長い歴史の中で、佐賀が日本の重要な役割を果たしていた時代が何度もありました。このすばらしい佐賀の文化や歴史を「語る」のは、とてもカッコいいことだと思いませんか。佐賀で生まれ育ったみなさんには、「私は佐賀出身です」と胸を張って佐賀の魅力を伝えてもらいたいです。

県民のみなさん、特に若い人たちへ。行動を起こすか、起こさないかで迷うときもあると思いますが、世界を見ていた先人たちのように、未来へ向かって広い視野で物事を見つめてほしい。そして、失敗を恐れずアクションを起こしてほしいと願っています。

※明治維新150年を機に、2018年3月から約10ヶ月にわたり佐賀県で開かれた歴史博覧会



山口知事と森川海人くんを囲んで [高校2年]古田明日香 松枝光 [高校1年]河野康晴 内田真緒 北村彩華 金子友彦 古賀啓太 [中学生]岩野 凜 古川麗音 宮国弥輝 岡 夏未 吉田理沙子 「自分たちが動くことで良くも悪くも地球に影響することがわかりました。SDGsの目標の意味を考えるため、学校全体で機会を持ち、みんなで考えたいと思いました」

佐賀県の取り組みとSDGs

約81万人の人々が暮らす佐賀県。あかちゃんから大人まですべての人が、自分らしくいきいきとした毎日を送ることができる佐賀県にしていくための具体的な4年間の方策を示したものが「佐賀県総合計画2019」です。「人を大切に、世界に誇れる佐賀づくり」を基本理念におき、政策の柱ごとにSDGsのゴールとの関連性も説明されています。

将来にわたり豊かな県土を

その中でも官民一体で取り組んでいるのが「森川海人っプロジェクト」です。私たちの生活を支えるこの自然を守ることで、大きな災害への対策、そして今生きている人々だけでなく、未来の子どもたちにも住み続けられる環境を残すなど多くの意味が込められています。

特に、森は川を通じて平野を豊かにします。有明海や玄海も、森の恩恵を受けています。そこで県では「森・川・海」をひとつとしてとらえ、森川海の保全活動に力を入れるとともに、県民が参加できるさまざまなイベントやワークショップを行ったり、森川海に関する情報を発信したりしています。

県民は2019年の大雨で「自然災害はよそごとではない」と身をもって感じました。このプロジェクトは、森川海を守り、育てていくことの大切さをひとりまたひとりへと広げています。



2018年10月28日の「森川海人っフェス！」では子どもたちが植樹活動を体験



プロジェクトキャプテン「森川海人くん」

ウォーキングアプリで健康増進

佐賀県民は移動に自家用車を使うことが多く、歩く機会が少ないと言われています。そこで開発されたのが佐賀県公式ウォーキングアプリ「SAGATOCO」です。毎日の歩数を計測できるほか、ランキング、ポイント機能などもついて楽しみながら歩くことができます。

歩くことは健康増進だけでなく幸福感が増えます。公共の交通手段を使う機会が増え、環境配慮にもつながります。さらに地域を知ること、快適な道路の整備、豊かなまちづくりといったさまざまな相乗効果も生まれそうです。

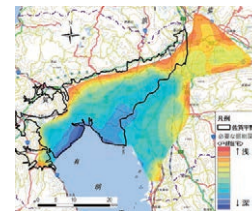


佐賀県公式ウォーキングアプリ「SAGATOCO」

再生可能エネルギーを世界に

佐賀県は、2018年3月に「佐賀県再生可能エネルギー等先進県実現化構想」を策定しました。これは県内の技術などを活かし日本・世界の再生可能エネルギー等の普及拡大を目指すものです。エネルギー起源のCO₂排出の削減、県内産業の活性化や雇用の拡大に貢献します。

その取り組みのひとつとして、2019年10月、佐賀県と佐賀大学は、再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム「CIREn(セイレン)」を立ち上げました。これから産学官連携で、オープンな研究開発が進められます。



地中熱の利用拡大に向けて佐賀平野の「地中熱ポテンシャルマップ」を作成



CIREn(セイレン)設立に先立ち連携協定を結んだ佐賀県と佐賀大学

SDGsアクションブックさが PDF版

2020年2月15日 初版発行

企画

認定NPO法人地球市民の会

編集ディレクター

上田壮一

編集

高橋香歩 佐藤由佳

執筆

市山理恵(p28-29) 佐藤由佳(p22-23,30-31)
鈴木宇夢(p8-9,12-13) 高橋香歩(p34-39,54-59)
田村史子(p6-7,10-11,14-17,20-21,26-27,32-33)
堀江令子(p18-19,24-25)

写真

田村史子(p16-17,21) 諸石 信(p54-57)
※その他、ページ内に特に記載がない写真は各団体・個人から提供されたものです

アートディレクター

武田英志

デザイン

小島花恵

SDGs for School事務局

笹尾実和子

協力

佐賀県政策課

中高生レポート指導

龍谷中学校・高等学校:陣内陽子

制作

一般社団法人Think the Earth

発行元

認定NPO法人地球市民の会
〒840-0822 佐賀県佐賀市高木町3-10
電話:0952-24-3334

©2020 地球市民の会

※教育以外の目的での本冊子の無断転載・複製を禁じます。

もっと学びたい人へ

この冊子を読んでSDGsをもっと学び、行動したくなったらアクセスしてみよう！



SDGs for School produced by Think the Earth

▶ <http://www.thinktheearth.net/sdgs/>

SDGs for Schoolは一般社団法人Think the Earthが運営する、創造的な志をもって持続可能な社会を目指す教師や生徒たちを応援するプロジェクトです。企業、メディア、自治体、NPO/NGO、大学等と連携しながらさまざまなプログラムを提供するほか、交流の場づくりや情報発信を行っています。



未来を変える目標 SDGsアイデアブック

編著・発行：一般社団法人Think the Earth 監修：蟹江憲史

SDGsの教材を学びの場に届け、先生や生徒を応援するプロジェクト「SDGs for School」の一環でつくられたビジュアルブック。本冊子の姉妹版であり、同様の構成で世界34の事例を紹介しています。アイデアに満ちた国内外の活動に触発されること間違いなし！



国連 SDGs公式サイト

▶ <https://www.un.org/sustainabledevelopment/> (英語)

世界全体のSDGsについての取り組みの入り口となるサイト。テキスト、動画、SNSなどさまざまなメディアを通じて最新情報が発信されています。



国連 持続可能な開発・ナレッジプラットフォーム

▶ <https://sustainabledevelopment.un.org/sdgs/> (英語)

採択時の目標、ターゲット、指標についての公式文書を原文で読むことができるほか、目標達成に向けた進捗状況も、毎年更新されています。



国連広報センター SDGsページ

▶ <http://www.unic.or.jp>

SDGsのことを日本語で知りたいと思ったら、まずはここにアクセスしよう。17個のロゴがダウンロードでき、授業で使いやすい日本語の映像を集めたページもあります。



佐賀県SDGs官民連携円卓フォーラム

佐賀県SDGs官民連携円卓フォーラム(座長:黒岩春地 事務局:地球市民の会)は、SDGsの普及・浸透による、世界的目標の達成に対して貢献できる佐賀県の基盤をつくることを目的に2019年10月18日に設立されました。困難な課題解決の事業化を目指すために、企業セクター、行政セクター、市民セクターとの協働を促進する場となることを期待しています。主な活動はSDGsに関わる官民の連携、情報交換・勉強会やセミナー・シンポジウムの開催、協働のマッチング、国内・世界のSDGsに関連する諸組織との連携です。フォーラムの会員には定期的にSDGsの情報をメールやSNSで提供しています。会員登録フォームは右のQRコードからアクセスできます。ぜひご参加ください。





SDGs アクションブック さが

本冊子のPDFデータ
をダウンロード
できます！



認定NPO法人
地球市民の会

お問い合わせ
認定NPO法人 地球市民の会
〒840-0822 佐賀県佐賀市高木町3-10
TEL 0952-24-3334
<http://www.terrapeople.or.jp>

